



TITLE:

# 社会と軍隊の関係 ―『女性と軍隊』論文からみたシンガポール―

AUTHOR(S):

福浦, 厚子

---

CITATION:

福浦, 厚子. 社会と軍隊の関係 ―『女性と軍隊』論文からみたシンガポール―. 人文學報 2004, 90: 113-136

ISSUE DATE:

2004-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/48641>

RIGHT:

# 社会と軍隊の関係

—『女性と軍隊』論文からみたシンガポール—

福 浦 厚 子

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 社会と軍隊
- 3 『女性と軍隊』論文レビュー
- 4 おわりに

## 1 は じ め に

社会と軍隊との関係は、隣接する周辺社会との直接的な関わりに留まらず、広くかつ多様な他の制度とも関連を持ち、目に見えない形で影響し合っていると思われる。しかし、それは実際にはどういった形で理解することができるのであろうか。本論では、社会における女性の立場や役割などが軍隊においてどのように理解されているのか、軍隊のなかでは女性、特に女性兵士はどのような位置づけにあるのか、その考えは軍隊を取り巻く社会とどう関連しているのかといった点から検討することで、社会と軍隊の関係を見てゆくことにしたい。そこで、シンガポールの事例研究を行ったクアの『女性と軍隊』論文を中心的に取り上げ、それを紹介する形で検討する。

シンガポール軍 (the Singapore Armed Forces: SAF) はいろいろな意味で特徴的である [Da Cunha 1999, Huxley 2000, Ngoei 2001]。よく言及されるのは、国家としての防衛レベルが緻密な点である。これは、そのままこの国の置かれている現状を映している。近隣諸国と比べて、国土が狭く、天然資源に欠け、多民族の人口構成であること等には国防上安定する要因が少ない。シンガポールの国防政策の特徴をハックスレイ [Huxley 2000: xx] が次のように述べている。「他国からの敵対的攻撃から守るために、世界でおそらく最も極度に防衛された国家で

あり、有事の際に動員される人員等はイスラエル、ヨーロッパ中立国、アジア共産国に匹敵する。東南アジアの他の国々と比べ、シンガポール軍は国内の治安維持や地域防衛よりも、攻撃という通常戦争を想定し、勢力を拡大している。また国防費の割合も大きく、国内の防衛産業や軍事技術機関とも連携している。ヨーロッパの政府や軍隊との緊密な安全保障と防衛上の連携を作りつつも、その軍事上の装備や組織、性能等は伏せている」点などである。

地理的にマレーシア、インドネシアといったマレー系人口が多い国家に取り囲まれているだけでなく、国内においても歴史的にマレー人と華人との民族紛争を経験してきているがゆえに、シンガポールは周辺国との関係を重視している。

「防衛政策の2大柱は外交と抑止力である」[Huxley 2000: 24] と国防大臣が述べているとおり、外交は安定した関係を助長するために展開され、UN, WTO, ASEAN, APEC 等といった関係に対応した活動を行っている。同時に外からの脅威を防ぐ目的で、抑止力を展開させてきた。この抑止力を重視した防衛政策は、Total Defence という概念で実施されている。社会のあらゆる場面で想定される危機的な事象に対して、軍だけでなくいつも誰もが防衛態勢を取ることができるよう、全面的な防備を促す施策<sup>1)</sup>である。そこでまず、シンガポール軍について概略する。

シンガポール志願防衛隊 (The Singapore Volunteer Corps) に、1954 年から 1956 年にかけてパートタイムの徴集兵が入隊し、それが 1950 年代後半には、シンガポール軍 (Singapore Military Forces: SMF) の正規兵に移行した。1957 年シンガポール歩兵連隊 (The Singapore Infantry Regiment: SIR) が設立され、二つの歩兵大隊が構成された。1957 年まで SMF が予備役を志願兵として募集 (infantry, armoured, artillery, field engineer, electrical and mechanical engineer, signals, transport, women's elements) していた。この前身は 1. 1854 年設立のシンガポール志願防衛ライフル隊 (The Singapore Volunteer Rifle Corps), 2. 1915 年にあったセポイ兵反乱の鎮圧に参加した人々, 3. 1942 年初期に日本占領に対して戦った人々, の三つからなる。

1959 年シンガポールは自治政府になるが、国外防衛はイギリスが引き受け、シンガポール自身がつ防衛力を植民地当局が財政上ならびに実践上支援した。1965 年マレーシアから分離独立し、既存の正規軍に SIR の二つの大隊になった。シンガポール国民以外からなる約 700 人の隊であった。第 2 大隊 (the second battalion: 2 SIR) は 1962 年から 1963 年にかけてマレーシア全体で行ったリクルート・キャンペーンで集めた人員と、195 人の連邦軍 (the federal army) からの人員により 1963 年に SIR のユニットとして創設され、のちに拡大された。ここは下士官を輩出する役目を果たしており、SIR の士官、部隊長はマレーシア人、それ以外はイギリス軍からなった。1965 年 10 月に政府はパートタイムの予備役をボランティアで募集し、同年末に議会はシンガポール陸軍 (The Singapore Army) と志願民間防衛軍 (The

Volunteer People's Defence Force: PDF) 設立の法案を通した。

1965年から1966年に、多くの非シンガポール人の隊員がSIRからマレーシア軍へ移動し、政治的社会的に華人主流のシンガポールから、マレー人はマレーシア軍へ動いた。1966年2月内務国防省は、シンガポール歩兵連隊(The Singapore Infantry Brigade)にSIR歩兵大隊(battalions)と志願隊を管理下に置かせた。同年2月、士官、下士官養成のためシンガポール軍訓練研究所(Singapore Armed Forces Training Institute: SAFTI)を設立する。1966年後半、1,100人の新規正規兵がシンガポールでリクルートされた。

軍設立に際して、当時の内務国防大臣は海外からの軍事アドバイスを得ることにした。ただし、イギリスは選ばず、スイス、インド、エジプト、イスラエルからであった。特に、イスラエルは最初に8人の士官を派遣している。イスラエルからは、1965年から1974年までの間、多い年(1969年)で45人を派遣している。訓練シラバスの発展に、イスラエルのミッションが大きな影響を与えた。小規模軍隊から、イスラエル型の全市民参加型の軍隊へというアイデアも、その影響と考えられる。1966年11月、あらゆる業種に参与させるため、1967年1月からは新規男性公務員と政府機関従事者に軍事訓練を義務化すると発表。1967年2月徴兵制導入が明らかにされ、18歳男性国民と永久居住者が召集されることになった。初年度は18,000人が参加した。基本訓練を週8時間行うパートタイムの徴兵制が導入されたが、その制度はさらに市民防衛軍(People's Defence Forces)、非武装自警団(The Unarmed Vigilante Corps)、警備特別保安隊(Police Special Constabulary)の三つに分かれた。徴兵終了後には12年間の予備役訓練が課される。全体の約10%(高い教育を受けた者)は2年のフルタイム訓練(または士官の場合、3年)と10年の予備役訓練を受ける。この方式で約600人が1967年8月に陸軍に徴兵され、200人の公務員も徴兵された。このことにより新たに第3連隊、第4連隊が結成された。これら連隊の士官の多くは、イスラエルの訓練修了者から選ばれた。同年7月、イギリスが撤退計画を発表。1970年に徴兵制(The Enlistment Act of 1970)が施行され、2年および2年半の徴兵になった。

## 2 社会と軍隊

### 2-1 国防と社会

シンガポールの特徴は、国防の備えが緻密で、そのことが近隣諸国への抑止力になっている点があげられるが、その個々の具体的な事象は、非常に多様である。国防と社会との関係はTotal Defenceといった、国土を防衛するために国民が動員される考えにみることができる。1984年に公表されたこの概念は、心理的防衛(Psychological Defence)、社会的防衛(Social Defence)、経済的防衛(Economic Defence)、民間防衛(Civil Defence)、軍事防衛(Military De-

fence) といった五つの要素から構成される。この内容について、少し触れたい。

心理的防衛とは、比較的年期の浅い移民世代の増加に伴い、外的侵略に対して倫理上の抵抗が少ないであろうという想定のもとに、シンガポール人としての集合的な意志を持たせる目的で考えられている。実際には、次のような五つのメッセージにまとめられ、国民教育を通して実施される。「シンガポールは私たちの祖国、私たちが属すべきはここである」、「シンガポールは防衛に相応しい、私たちは伝統と生活様式を守る」、「シンガポールを防衛する、私たちは家庭と家族、子どもの将来の安全のために戦いたい」、「私たちは自分たちでシンガポールを防衛しなければならない、他の誰かが代わりにこの義務を負ってくれるわけではない」、「私たちは攻撃を思い留まらせることができる、トータル・ディフェンスにより、平和な生活ができる」[Huxley 2000]<sup>2)</sup>。これらの価値観が主に教育政策や教科教育だけでなく社会教育などの場面においても、実践される。

社会的防衛とは、民族的にも宗教的にも言語的にも多様な、求心力のない社会を結合させることである。民族間の調和を求め、多文化社会に寛容な態度を取る重要性を、教育や住宅政策において実施する。例えば、住宅政策を例に取るならば、華人、マレー人、タミル人等の人口構成比率に対応した割合で、政府が供給する公団アパート団地に居住する国民の比率は決まっている。集合的に居住する人々の民族比が、それぞれバランスをとるように、居住許可を出す段階で制御されている。

経済的防衛とは、シンガポール経済が有事に際して、またそれに乗じた状況で崩壊しないように備えることである。不測の事態に際して、人材や設備が動員される場合には、機能を継続させる権限を工場やオフィスに与えるといった計画がある。私企業セクターでも、危機に際しては、文民権力と軍事権力に対して物的かつ人的資源を共有することが要請される。また、基本的必需品の備蓄も要求されている<sup>3)</sup>。

民間防衛は、国民の命を守り、負傷者の数を抑え、財産へのダメージを最小限に止め、戦争に際しては正常な状態へと戻る道を開くことが目的とされる。狭い国土に人口が集中しており、居住区と軍事施設が近接しているため、国民は攻撃にさらされる。シンガポール民間防衛隊が食糧、燃料等の配布や避難を誘導するだけでなく、国民一人一人が兵士として最前線で戦うことを再認識させることも意図している。

軍事防衛は、シンガポールの抑止力の根幹をなすものであり、実際に攻撃を阻止するのは軍事力であると考えられている。周辺諸国が1997年の不況以来、防衛費を削減しているなか、シンガポールだけは逆に増強している。景気が落ち込んでいる時こそ、社会不安を取り除くために、防衛支出により安定を作り、海外からの資本投資を呼び込もうという意図がある。

これら五つの防衛の側面は、相互に関連しあっているだけでなく、社会の様々な事象と結びついているために、防衛でありつつ、社会政策の基盤にもなっている。そのため、国防と社会

が非常に緊密につながる事態が起こっている。

そこで次に、国民各自が国防に対してどういった考えをもっているのか、見てゆくことにする。特に軍隊において、女性がどういう役割を果たしているのか、また期待されている役目とはどういうものか、まず女性兵士についての事実関係を確認したい。

## 2-2 シンガポール軍の女性兵士

シンガポール軍は1967年に創設されて以来、当初から女性を採用していた。機会均等政策の結果として、軍に受け入れられたのではなく、人員不足のためであり、主として基礎軍事訓練を必要としない業種や医療班においてその数は拡充された [Huxley 2000]。1980年代になると召集兵の数はピーク時の半分になり、代わりに女性兵士が重要視されるようになった。1986年にはイスラエルに倣い、女性兵士を戦闘指導員に就かせることを決定する。翌年からの不況により、女性兵士のリクルートは一旦後退するが、1990年までに約4,000人（正規兵士全体の約2割）に従事している。

しかし現実には、女性士官の養成にそれほど積極的ではない。1960年代後半から女性士官は養成されてきたが、士官候補学校には1972年まで入れず、別のプログラムが用意されていた。1990年代初めで女性士官が200人未満という数字は、全正規士官と下士官の1%となり、非常に少ない存在であることがわかる。

次にシンガポール軍に関するこれまでの社会学的ならびに人類学的研究について見てゆく。

## 2-3 シンガポール軍についての先行研究

軍隊に関しては、政治や国際関係などの側面から分析した研究はこれまでにもあるし、またマレーシアなどの周辺諸国との比較も行われているが、社会学的ならびに人類学的研究は非常に限られている。軍隊という組織や戦略を研究するのではなく、個別の具体例を取り上げることの難しさがあるというのは言うまでもない。そのなかでも珍しく軍の広報活動について取り上げたのはチャン [Chan 1990] であった。彼女はシンガポール軍の作成するリクルートや紹介を目的としたテレビや新聞の広告、ポスターなどを活用し、そのイデオロギー的影響について考察した。また、他に、徴兵制が男らしさを獲得する機関として期待されていることに対して疑問を呈した論文 [Le Blond 1995] からは、軍隊の役目を越えた機能が社会的に理解されていることを知ることができる。軍へのリクルートを目的とした雑誌広告やポスターだけでなく、実際に女性士官らへの聞き取り調査も行い、女性兵士の役割等について分析したのは、クア [Kua 1997] の論文である。エスニシティの側面から研究したのは、タミル系の召集兵を対象とした論文である [Dorai 2001]。シンガポールにおいて、徴兵制で召集される兵士のエスニックな構成は多様である。なかでもタミル系の召集兵に対象を絞り、徴兵制が持つとされ

る集団の一体化等の機能からはみ出て行く者の、その行動の根拠を問うこの論文は、女性兵士についての言及はないが、軍隊経験が持つもう一つの意味について知ることができる。また、ゴイ [Ngoei 2001] は共通の国民的経験となっている徴兵制が国民国家のなかでどういった位置を占めるのか、さらに召集兵に対して軍が使う歴史的な語りや神話がどのようなイデオロギー効果を持つのか、その背後から解明しようとしている。

### 3 『女性と軍隊』論文レビュー

以下ではクアがシンガポール国立大学文学・社会科学部社会学科へ社会科学学士の申請のために1997年に提出した論文 (academic exercise) 『女性と軍隊——軍隊における女性の *feminization* (女性化)』を詳述する。既述の通り、軍隊について個別の事例研究をしたものは非常に少なく、兵士に個々にインタビューしたものは、このクアの論文をおいて他にない。そこでこの論文を以下で詳しく紹介したい。なお、以下の節は、かならずしもクアの論文構成に対応しているわけではない。

#### (1) はじめに

「軍隊の女性」や「女性兵士」は依然として、撞着語法に思える。1995年8月、アメリカ最高裁は、男子のみの軍の学校を憲法違反とした。Shannon Faulknerはこの決定に従い、南カリフォルニア校に入学を許された最初の女性となったが、公表された6日後に、プレッシャーと差別とハラスメントにより辞めた。これは軍隊で女性が直面する二重の問題を示している。

第一に、女性はいかなる軍事機関にも参加すべきでないという考えと戦わねばならない。この考えを擁護するのは、軍のなかの男性や、「自然な」ジェンダー・ロールのステレオタイプをもつ個人。第二に、軍隊でのキャリアをめざす女性は、突然現れる難しいシナリオをどううまくこなしてゆくのか決めなければならない。女性は、この男性中心の環境にどのように適応するのか。この男性中心の環境はもっと *feminine* になるのか、あるいは、さらに *masculine* になるのか。

#### (2) 目 的

クアは、こう問いかける。“*feminization*” (女性化) が意味するものは何か。軍事力における *feminization* には二つのレベルがある。女性兵士の数の増加という意味と、軍における女性たちを *feminize* するという意味である。

*feminization* という言葉は、軍における女性の数と役割の増加を示してきた。Boulègue

[1991] は、「フランス軍への女性の参加は、軍全体の“feminize”を意味するものではない」。つまり、法の制定と、実際に女性を戦闘員として受け入れるのとは違うと述べている。また、男女の知覚の違いを、軍の指導者としての差と見なし、それが軍の文化にどれくらい作用するのか検討した。その結果、男女間に実質的な差はなかった。そして、軍隊に女性が完全に統合されること、つまり、徴兵とそれまで課されていた割り当ての抑制も取り払い、すべて平等にということである。戦闘除外と限定的役割が、依然多くの国で一般的に課されている。

### （３）女性と兵士についての先行文献

入隊した女性は、想定されたステレオタイプと同じか、それ以上の能力を発揮することが期待され、それと戦っている。女性は同僚として受け入れられるために、変わるかあるいは適応しなければならない。「いかなる女性兵士の仕事でも内在的に自身を作ってゆく、または再創造してゆくべき要求がある」[Barkalow and Raab 1991: 123-127]。軍に女性が入隊するというのは、女性が従順な娘として、性的な対象として、母性的な役割を引き受ける者として、といった他の役目も組み込まなければならないことを意味している [Rustad 1991: 123-127]。このことは、軍で女性が果たす役目と同時に遂行されるべき役割が付け加わっていることを意味している。女性兵士は、男性にとって脅威ある存在ではないものと見なされるために、femininity を強調しなければならない。この方が軍の男性に、女性がより容易に受け入れられるからである。

これは軍隊の女性の feminization の一面である。何が femininity かを彼女たちに押しつけるのであり、一つあるいはそれ以上の役割を持たせながら、女性的なるものを受け入れさせるのである。

軍隊において女性を feminization するというのは、「女性」と「兵士」という両立しない意味に一種の加工をすることである。例えば、軍隊の女性の femininity は、異なる扱いをされる際の原因と結果のいずれにも見られる。異なる扱いとは、性差別やセクシャル・ハラスメントと言い換えられたりする。性差別とは、一方の性の決定に基づくもの、あるいは、人のキャリアや上昇を邪魔するところにあるものと定義される。

これは軍隊の女性が、ほとんどいつも「劣位」の「特異」な役割にあることを指している。軍隊の女性は、軍隊の暴力を、威信に導くための特別な、あるいはみせかけの手段と見なされている。そして、そのことにより暴力を行使する権利と正当性は絶えず是認されるのである。第一次中東戦争（1948-1949）の間、ユダヤ人女性戦闘員というのは「ユダヤ人があらゆる可能性のある力を使う用意があることを示す戦争であることをアラブ人」に示そうとした [Saywell 1991: 162]。軍隊の女性が、実際には軍を支援する全女性人口を代表すると見なされており、こうして暴力の解釈が行われる。彼女らの存在は、国家がスポンサーとなる暴力と、



その寄って来るところを正当化するために利用される。

彼女たちはまた、公的制度や非公式の慣習でも絶えず「守られている」。女性兵士は守られるべきというまさしくその考えは、女性は自分で自分の世話をできないという考えを含意し、強化している。アメリカの退役少将の Jeanne M. Holm [1991] は次のように述べている。「軍のなかで守られるという考えは矛盾している。軍隊は定義によれば、危険の多い専門職であり、……男性、女性いずれも志願兵は、その現実を受け入れる準備をしておくべき、あるいは、他の分野の仕事を探すべきである。特に上級士官や下士官階級にとっては、女性に対して出される保護的な規則は非常に少なく、能力を試されるような仕事や、キャリアを上昇させる仕事であればなおさらである」[Holm 1991: 70]。これは、男性こそが「本当の兵 (real soldiers)」であると見なし続けるある種の占有領域において、女性を平等なものとして受け入れることに対する性的差別であり、不本意さであり、無能さの一端を示している。

世界の大半の軍隊は、女性に門戸を開いている。しかし、戦闘部門を開いているのはわずかである。一連のテストののち、カナダは1989年に女性を戦闘部門へ受け入れた。カナダ人権法廷 (The Canadian Human Rights Tribunal) は「すべての戦闘部門は、女性に開かれるべきであり、いかなる制限も、数の上で置いてはならないと命じる」[Suh 1991: 170]。

しかし、カナダの軍隊の女性はいまだ潜水艦隊への入隊を阻まれている。それは、ジェンダーに関わるプライバシーが保持できないという理由からだ。ノルウェー、オランダ、ベルギー、スウェーデンも戦闘地帯や戦闘任務に女性を配備することに制限を設けてはいない。戦闘部門を女性に対して開放したことが、彼女たちのセルフ・イメージや役割の構築に影響を及ぼしたのであろうか。女性に対して軍が門戸を開いているのは、戦争や革命、またフェミニスト・グループや女性からの外圧、人材の欠乏などといった、通常とは異なる状況の結果であった。このことは、二つの世界大戦のアメリカや第一次中東戦争が例証している。第一次世界大戦の際、多くの女性が軍の位階や特権なしにアメリカ軍に徴兵され、戦争が終わると除隊させられた。彼女らの除隊は「彼女らの貢献の性質が補助的なもので、表層的なものであったことが強調された。完全な犠牲を払ったのは、結局男だったというのだ」[Feld 1978: 561]。

そのため軍に入隊した女性は伝統的な女性の役目、すなわち、運営を支えたり、健康や福祉、娯楽に関する仕事に就く役割に追いやられた。こういった役割は、男は能動的に、女は受動的にという性役割のステレオタイプに逆らわないがゆえに、社会的には正当化される。兵士というものは、残忍で、攻撃的で、乱暴であるという先入観と合致するような暴力の攻撃手段として見なされ、一方、女性の慈しみ、優しく、もの静かなイメージは、女性が戦闘行動など取らないのは言うまでもなく、決して軍にも入らないという考えを支えている。

ドイツでは女性は医療部隊か音楽隊に限られており、戦闘部隊には入れない。後衛の病院で医療士官になることに限られる。船内は密接し、閉鎖された環境になるため「不便」である、

また船が戦闘に出る可能性があるという理由で、女性は船に乗れない。

どのように戦闘を定義するのか。WITA（Women in the Army）によれば戦闘の定義は、「個人または少数集団で敵と武器を持って交戦する、または直接敵の武器にさらされる。敵個人と高い確率で直接攻撃を交わらせることがあり、実際に捕らえられる危険がある。直接の戦闘は、敵を破壊したり、捕まえるために、ショック効果を用いるもので、他方、砲火で攻撃を撃退したり、反撃したりするもの」[Williams 1989: 57] とされる。

戦闘に女性が参加することに軍が反対する理由は、女性に身体的危険が伴うからだけでなく、戦闘では、他人を殺したり、傷つけたりすることも要求されるからである。しかし、戦闘や戦闘に近いものと、部隊支援の違いは、戦争や紛争において航空機や長距離ミサイルを使う区域では、あいまいである。湾岸戦争の際に、イラクに捕まった女性アメリカ兵士は兵站部門の運転手だった。彼女が捕まることは予見されていなかったことである。戦闘員や非戦闘員というのは仕事のカテゴリーであり、現実を反映したものではない。湾岸戦争の際、軍隊の女性は非戦闘や戦闘支援に就いていても負傷したり、殺された。

#### （４） 方 法

本論では、シンガポール軍（SAF）でキャリア形成している個人を検討する。SAF では、女性は自主的に入隊し、男性は正規のフルタイム召集兵や予備役となる。昇進を比較するために、同じキャリアをもつ正規の人々に絞って見てゆく。昇進の機会に限られているため、競争率は上がっており、とりわけ、戦闘部門では軍に女性が存在することに対する抵抗感も増えている。

軍服が、明らかに軍の仕事を目に見える形で示しているものであるから、制服組に焦点を絞る。制服は過去や戦争から引き出される多様な意味を込めている。ちょうどメダルや記章が、着ている人の功績や業績を示しているように、軍服は着ている人を兵士として認識させるからである。

資料収集の主な手段は、詳細なインタビューである。インタビューでは、軍人としての自己認識や、女性に対しては男性軍人について尋ねたりもした。男女とも各 10 人の個人を選び、戦闘部門、支援部門、技術部門などの多様性を持たせた。SAF の比率に応じたわけではないが、情報提供者の大半は陸軍であった。

他の資料収集は非公式な雑談や次のような人々へのインタビューである。徴兵を終えた人、以前アメリカ歩兵連隊にいた人やドイツ海軍士官候補生だった人。また、研究に関するレビューや広範囲な資料読解による所も大きい。軍広報部による SAF の公式見解も用いた。しかし、国防省（MINDEF）から情報を得ることは拒否された。そこで新聞や SAF の広告や SAF の雑誌、年刊誌、記念誌を通して見解を得るようにした。

(5) SAF の女性の役割：SAF の広告研究

In the early morning sun,  
I am training, having fun,  
I'm a soldier, I'm a man,  
got the best job in the land.  
Any sweat, no sweat.  
Uphill, downhill, I don't care,  
love the Army anywhere.

(軍の歌 Army Television Commercial December 1994 より)

これは、一般から肯定的な反応のあった、軍のテレビ広告を引用したものである。この広告は軍の肯定的で魅力的なイメージを示している。そこには、厳しい訓練を遂げ、楽しむ姿がある。兵士となる男性や、軍の訓練により兵士となった者こそが「本物の男」となるのである。このことは新聞の記事“Join our team. Be a soldier. Be a man.” [*The Straits Times* 28 Dec 1994] にも示されている。軍隊は武力の拡大により、malenessを賞賛し、作り出す組織となっている。“a man”であるということは、身体的な適合性や強さと結びついている。そして、この“maleness”は軍の一部となることにより再び強化される。軍は伝統的に男性領域である。それがまた、排他性とエリート主義の要因となっている。

これはまた、相互に排他的なジェンダー・ロールのステレオタイプ二分法、つまり、力無き者、その名の通り、女性、幼い者、老人、弱者などを保護する者として男性があるという考えを利用するものである。このことが、軍隊の女性を極端に弱い立場にしている。軍はmasculinityを礼賛している。Karen O'DunivinはこのことをCMW (combat-masculine-warrior) パラダイムと名付けた [O'Dunivin 1994]。女性は実際に、軍にリクルートされている。ジェンダーを平等化させるために起こっている世界規模の傾向であり、軍の人材不足を補うためでもある。SAFの場合、近年この伝統的に男性中心の領域に女性をリクルートするため、積極的なプログラムを始めた。NSF (National Servicemen, 義務兵役者) の人数が、10年前の18,000人から今日の15,000人に減っている [*The Sunday Times* 1 Dec 1996]。

SAFは軍の女性をfeminineであると描くことによって、女性を軍に誘ってきた。女性は、femininityを失わずに男性のなかで優れた力を発揮しているという二重の成功者として描かれている。このことは、男性は活動的、女性は受動的な軍の仕事という分離により維持されている。軍が女性に門戸を開きつつも、男性支配を強く維持させていることを示している。女性にfemininityを維持させるために、女性は女性に相応しい仕事やキャリアに追いやられる。例えば、管理部門、催し物、福祉、医療、人材、兵站業務などである。

女性だけを狙った広告は少ししかない、ほとんどの広告は、正規の戦闘力を編成する男性に焦点を絞っている。しかし、いくつかの例は男性が masculine で、女性は feminine であるという二分法を固定している。

空軍の女性士官の広告 [*Her World Magazine* Oct 1996] では、三つのマネキンが空軍のそれぞれ違うユニフォームを着ている。パレードドレスとフォーマルドレスと事務服である。最後のせりふは次のとおり。「彼女の装備一式は 2,525 ドルから」このことは空軍が女性から、ユニフォームがかっこいいから入りたいと思ってもらいたいと考えていることを示唆している。

驚いたのは、恐らく故意にと思われるが、Number 4 S がない。これは実際にはパイロットと航空技術士官 (Air Engineering Officer: AEO) が着用するものである。Number 4 S はズボンの制服であり、陸軍では、カモフラージュ制服とか野戦服と呼ばれる。この制服は、野外に出る時にはどの軍人でも着用する。外見よりも機能を重視する所で用いる。しかし広告では、仕事の feminine で魅力的な側面に傾注することが選ばれている。このことは、たいていの女性が femininity を失ったと見なされたくないと思い、とりわけ男性中心の職業に就く場合、男女の違いを依然強調したいと思っていると想定している。

他の広告では、空軍の士官として期待される資質を強調している。例えば「命令を出す風格」や「指示を頼られ、責任を負い、先導するような」資質のことである [Kua 1997: 17]。

また別の広告は雑誌 *etc* に出ていたもの (1996 年 9 月 6 日) であるが、これはジェンダー中立的である。パイロットと AEO のポストだけを比較すると、専門性が強調されている。「パイロットという仕事は、リーダーと専門家をつに合わせた仕事である。」「高度に近代化された環境で仕事したいならば、専門的な志望を知るすべての機会がある」(AEO の仕事について)

しかし、航空副隊長 (Air Executive Officer: AXO) の仕事については「活力があり、兵站業務の任を負う」としている。SAF の女性が一般に見られるのは、二つのエリア、つまりサポートの役目と兵士や装備の供給やケアの役目である。

陸軍の女性士官の広告では、陸軍女性士官が「社会で尊敬される存在」だと強調している。このことは女性が一般社会では尊敬されていないことを意味している。しかし、もし「陸軍の指導者」で、この伝統的に男性中心の領域に受け入れられれば、彼女は「尊敬されるべき個人」となるのである。ただし、男性と軍隊の文化に属することによってのみ、彼女は敬意を払われる。その場合、このことは、男性士官の広告とは対照的である。ここでは「名誉、勇氣、責任、犠牲」を引き受ける個人として描かれている。しかし女性士官の広告には、こうした資質のことは一切触れておらず、「思いやりと誠実さのバランスある」人として描かれている。

また別の広告では、陸軍男性士官の写真が出ており「道義への絶え間ない追求」と「国家への間断なき献身」というものが、終わることなく人生を通して存続する、あるいは軍に男性士官としてキャリアを積む限り続くと書かれている。しかし、同じ構図の陸軍女性士官の写真の

出ている広告では、言外に男性と女性の基準が違うことを意味している。「絶え間ない永遠の献身」など語られていない。彼女は指導するために「勝っていなければ」ならないし、依然として「国家に対しては心と魂を持つ女性」でいなければならない。“spirit”や“heart and soul”という語は、実際には女性士官の束の間の貢献を強調している。再び女性士官の二重の役割が持ち出される。兵士でいることは「自然」なことで、masculinity の概念と一致する。それが軍という職業がいつも「少年から男を作る」[Williams 1989: 66] ことを強調する理由である。しかし、戦争の武器とその破壊力は、女性に想定される femaleness と一致しないもののように見える。そのため、軍の広告は女から「男」を作ろうとはしていない。

しかし SAF の広告の大半は依然男性をターゲットにしており、ジェンダー・ロールのステレオタイプ、そして軍における男性の「当たり前さ」や、男性と女性の身体や知覚の違いを強調することがよく行われている。

#### (6) 女性軍隊従事者の増員需要と SAF における役割拡大

女性は 1967 年に SAF が創設されて以来、事務員、タイピスト、行政部門スタッフとして SAF のなかにいた。その場合、女性が軍の一員という深刻さはなかった。1972 年後半に開催された女性士官候補コースに参加した士官たちについて、上級下士官たちは、SAF での女性の地位はもっと安定し、高められるだろうと言っていた。単なる女性スタッフというだけでなく、女性は今や「士官と淑女」の位置を維持しなければならない。「つまり男のようではあるが、またいつも淑女であり、決して攻撃的になってはならない」[Williams 1989: 5] のである。

「夫より地位が上になるけれども、家では依然夫がボスです。我が家の構造に影響があるとは思いません。たとえ、就業中に会っても夫が敬礼し、それに私が返すでしょう。私たちは二人とも兵士です。そのことを理解し受容しています」[Pioneer Dec 1972: 11]。

この士官の特別な言い回しは、女性をリクルートする際の懸念や、軍のなかの女性に反対する立場の見方を懐柔するものである。彼女は明確に、社会でも家でも、依然として男性に従属していることを示している。彼女のキャリア選択は、受け入れられているジェンダー・ロールのステレオタイプを覆すものではない。

1975 年に SAF の女性のなかで、空挺部隊のコースへ行く機会が与えられる者がいた。全員で 9 人の女性が整備士になった。「ハーネスをつけ、ヘルメット、ジャンプ用具を持てば、女の子には見えない。しかし、女性の気質は容易には滅びない」[Pioneer Aug 1975: 23]。彼女たちは長い髪をクリップできちんとまとめた。短く切りたくないからという者もいた。7 年もポニー・テールにしている人もおり、長い髪は femininity の典型として伸ばしていた。これは軍隊の女性が男性的だと見なされたくないという抵抗を示している。「男の一人」になり、

女性は自分の性に応じた「尊厳」を失うからである [Williams 1989: 86]。そのため、女性は軍に入って支援部門に留まるのは驚くことではない、「伝統的に女性の仕事」だからである。

1976年にSAFは、新しい訓練コースを女性士官候補生用に始めた。女性士官は手直しされた水準のコースに入る。そのあと、兵站業務か人材業務の訓練を受ける。つまり、その二種類の士官にしか任命されないということなのである。女性はまた男性候補生や士官と「同様」の給与を保証される。

1976年には1,000人を超える女性のうち14人しか女性士官はいなかった。最高ランクはNancy Tan大尉 (Captain) で、SAF本部の司令官 (Commanding Officer) であった [Pioneer Jun 1976]。約20年が経った1997年現在、女性の最高位は少佐 (Major) である。

1977年に、月間ベスト兵士に伍長 (Corporal) のChua Hare Noiが空軍から選ばれた。1979年に空軍は、パイロット養成に女性を受け入れた。女性パイロットには「いかなる特権もない」ことを強調している [Pioneer Feb 1979: 5]。空軍はまた、女性の防御管制官と輸送管制官を1979年に起用した。しかし、男性より劣っているということが男性士官により言及されている。

「女性は一般に選ばれない。仕事で精神的に必要とされるのは、平均的な女性が実行するにはあまりにも重大だからである。士官候補のChanは例外である。彼女はどこをとっても男並みであることが証明された。よくやっているといえる」(主任指導員Sung Ying Chow大尉 [Pioneer May 1979: 5])。

「当然男の方が女よりプレッシャーが大きい。しかし、3人の女の子 (girls) はコースから脱落せずに同じ力を持つことを証明した」(空輸訓練学校司令官Khoo Meng Piak大尉 [Pioneer June 1979: 11])。

こういったコメントは軍隊に女性がいるにも関わらず、依然として軍隊の女性は失敗を期待されていることを明らかにしている。軍隊の女性は二つの役割のバランスを取らねばならない。つまり女性だからといって手を抜いたり、特典を得たりしないという意味で有能であるということ、そして、同時に女であるということが要求されているのである。違い続け、また男性が女性との違いに悩んだり、ジェンダー・ステレオタイプに脅かされたりしないように、それほど違いすぎないようにするのである。

空軍の最初の女性パイロットであるKoh Chai Hong中尉 (Lieutenant) は、1979年に士官学校を卒業した。1980年2月のPioneerで彼女は戦闘機パイロットとして訓練中とあるが、今日まで空軍に戦闘機女性パイロットは一人もいない。1979年は、SAFの女性が初めて大尉に任命された年であり、Agnes Fongが空軍兵站地で、陸軍の最初の指令官 (Commanding Officer) になった [Pioneer Nov 1979: 13]。女性が任命されたことは飛躍的前進ではあったが、Fongは兵站業務だった。このことは明らかに、女性はサービスと支援部門でだけ地位が

得られることを示している。戦闘はどうか。

しばらくして、1986年7月、女性に戦闘インストラクターの仕事を開放した。彼女たちは今、歩兵隊、通信隊、機甲部隊、砲兵隊、軍事医学で男性を訓練している。

「第一の目的はSAFの女性を上へとチャレンジする機会を広げることであり、人材を最適化することである」[*Pioneer* Apr 1990: 24]。

女性戦闘インストラクターは1986年6月より訓練された。「少子化や徴兵採用者の減少に直面するなかで、“人”材力を最大限活用することになる。こういった女性たちは前線には配備されないが、指導員や事務職員の役割を担う。SAFの女性は、戦闘での男性よりも自由は多い」[*Pioneer* Jun 1993: 1]。

女性は依然として保護され、国防のために派遣されることはない。戦場には出ない。女性は机に縛られ、サービス部門の仕事といった支援の役割を担っている。戦闘で女性がいるというのは、「作戦準備」の欠陥を意味するのである。

1988年に陸軍はまた、技術工科大学・シンガポール軍合同修了課程（Joint Polytechnic-SAF Diploma Scheme: JPSDS）を女性候補に開いた。陸軍のこの新しい計画は、SAFの技術専門職が、地位の低い職で、女性にきつい仕事であるという誤解を強めた[*Pioneer* Jul 1988]。よりよい人材を確保するために1992年には、SAF成績優秀者（女性）奨学（Merit Scholar (Women)）が女性に開かれた。開かれたとはいえ男性とカテゴリーを分けており、同等の扱いではない。

1992年に、女性海軍士官を軍の船に乗せることが決められ、伝統的な軍事文化に新たな道が拓かれた。1993年には、戦闘職の砲兵隊と通信隊を女性に開いた。軍事文化はmalenessや「男らしさの追求（masculine pursuits）」から、よりジェンダー中立的で専門的なものに変化した。相応しい者が役割に就くのである。1994年にはLim Sok Bee大尉が砲兵隊中隊の女性初の司令官となることで、軍事史に新しい一頁を加えた。

#### （7）自分の任務を果たす

ある男性下級下士官は女性入隊者を訓練してきた人であるが、ジェンダー・ステレオタイプに固執しているのは、女性正規メンバー自身だと考えている。

「女性は他の正規メンバーのようにまじめに仕事に取り組もうとしていない。というのも……わからないが、時には身体的限界があると思えることもある。単に諦めているようだ。もし戦争となれば命を落とすことにもなる。もし戦闘中や戦場でショックを受けたら、部下はどうなるのか。まじめな話、指令官にはなれない」[Kua 1997: 30]。

しかし武器を用いる場合の女性の能力には、レトリックが隠されている。男性正規メンバーは武器を使えるのかという問題である。一般に彼ら（インタビューされている人々）と女性（一

般）が砲火で戦えるかと聞かれたら、男性情報提供者は肯定的に共鳴するだろう。なかには、そうすべきだとも主張する。砲火を使う女性の能力について、大半の人は疑いを持っており「なかにはできるし、 そうしたくない人もいる。男性と同じ。男性のなかにも砲火を嫌がる人はいる。」と見なされる。

女性情報提供者らも、 生き残る必要が生じれば使えるという点でみな同意している。「殺すか殺されるか」の状況であれば女性も闘う。また女性下級士官は「男もいつも怖がっている。男は逃げ出さないとはいわないほうがいい、 生命に危機が及べば男も女も同じ。男に自分のために命を投げ出せとは言えない。」[Kua 1997: 30]

男性は 90 から 95% が戦闘職である。戦闘職の士官は男女ともに三つの段階を経過する。司令の段階、 インストラクターの段階、 事務職の仕事。一般契約期間は 6 年である。戦闘の士官は現地に 4 年から 6 年いて、 武器を用いて戦わせる。

#### （８） 軍隊における性差別、セクハラが存在

軍の女性はセクハラに遭遇しやすい。弱い性を守り、 紳士としての重要性を説かれながら、 その一方で男性性 (masculinity)、 男らしさ (manhood) の崇拝があり、 時には性的征服や武勇に解釈される。軍の女性は、 身体上は女性であるため、 女性としての考慮を「要求」される。しかし軍は男性の領域であるため、 それほど feminine であってはならないし、 いつも性的に近づきやすい感じでもない。

セクハラはどの軍でもタブーである。明確な定義ができないし、 軍を紛糾させるからである。セクハラが存在と認知は軍固有の名誉に関わることを考えられている。女性は「サービスに向いて」おり、 その仕事の一部としてセクハラも受け入れると考えられている。セクハラは低い生産性、 高い不在性 (欠勤) 等を招く [Culbertson and Rosenfeld 1994; Firestone and Harris 1994]。セクハラ対策は男女を身体的に離すことである。しかしこれは男女の違いを強調するだけでなく、 女性の地位を「考慮」することによって女性を他者にさせてしまうことである。その結果、 女性は羽の生えそろった一人前の軍の正規メンバーとして受け入れられるのではなく、 軍を助けるどころか、 もっと問題のある存在と見なされるようになる。

SAF でセクハラは問題となっていない。いくつかの理由が考えられる。まず、 SAF の女性は直接自分に向けられたり「あからさまに述べている」場合を除いては、 低俗な言葉をセクハラとは捉えていない。二つ目に、 軍の女性は軍を男性支配的な所として受け入れているので、 卑俗な言葉や汚いジョークも受け入れている。

今やセクハラはタブーではない。ほとんどの軍隊が反セクハラの方立を取っている。SAF にも処罰がある。しかし、 人が問題処理するため、 多くの男性指導者は疑われている者を許そうとする。セクハラという罪が告発された者のキャリアを終わりにしてしまうからである。



(9) 第二クラスの市民としての軍隊女性

軍隊の女性是一般に、入隊基準が厳しいため教育水準も高い。一方男なら誰でも、歩兵になれる。それでも軍の女性はいつも戦闘員や防衛者としての可能性を持ちつつ、一番最後の選択肢にとどめ置かれている。SAFの女性戦闘兵は、最前線に送られるとは考えず、代わりに徴兵された男性兵士が行き、自分達は訓練の役目を引き受けされられると考えていた。いずれにせよ、主たる目的は「男性を戦闘に集中させること」と考えている [Koh 1993: 80]。

情報提供者に、もし女性が本当の兵士だったらと尋ねてみたら、全員ためらい、全員が女性にはサービス部門に優れていると述べた。ある人は「もし女性が外の社会が要請することに従おうと主張するなら、困難に直面するだろう。(軍では) 自分の言ったことに断固たる態度を取らねばならないし、自信も必要だからである。」 [Kua 1997: 35] 事実ある人は、はっきりとSAFの女性は本当の兵士ではないと言った。別の人はもう少し「思いやり」があった。彼は、女性のなかにも本物の兵士はいると言った。そうでない女性というのは、軍隊での仕事を理解することを拒否している人々である。特に戦闘部門は文民業種や個人業種と比べ、献身的であることが求められる。

軍の進歩を妨げているのは、女性の身体的違いにあるのか尋ねた。男性下級士官は「女性の育ち方に問題がある……男女に生来のものとは言わない。(しかし) 攻撃性の違いはある。」しかし他の男性情報提供者は女性に対して、自身もまた軍の人も、より寛大な態度を取ることを当然とする違いがあるという事実を述べた。例えば、女性により多くの恩恵を与られていると思うかと尋ねたところ、ある人は「そうだ。そうでないわけがない。何と言っても彼女らは女なのだから。」と。しかし同時に、女性のキャリア形成に対して、全く違う扱いがある。女性には平等に到達することを決して望むことができない、というのも彼女らはいつも決定事項や実践練習を通して男女の同僚の考えのなかでは、女性で有り続けているからである。

ある男性によると、生物学的違いというわけではないが、決して女性を平等に扱えないと言っていた。女性と訓練に出ると、女性にいつでも先に休むように命じ、許可していた。また先に家に帰るのも許している。男性にも先に帰ることを許しているのか聞いたところ「よい理由があれば」と言った。理由がない場合、男性が主張すれば帰らせるだろうが、その代わりに変わった奴だと否定的に捉えるという。

「男女には生物学的差があると思う。それで持久力や責任に関しても同じとは期待できない。自分は男性として2日間家に帰れなくてもたいしたことではない。48時間眠れなくても大丈夫。」

一般的な言い方に「女性は腹をくくって戦えない (Women do not have the stomach for battle.)」というのがある。だがこれは、先の人が述べたように、社会化されてきた攻撃性の違いである。

ある男性下級士官は、女性のために仕事をするを別に気には掛けない。もしその女性が高い地位であれば、軍が彼女を信用しその能力を証明しているから高いのだと考える。とはいえ戦争となれば、自分が指導することを望んでいる。「自分が女性を導きたい。あるいは女性を陸軍に連れて行きたくない。もし女性が自分を導いたら、それは構わない。命じられる限り。」歩兵連隊のある男性下級士官は、いかなるサービスの主任にも女性になる可能性は低い、防衛の主任になることはあり得ないと言う。というのもそのイメージが他の軍隊へ投影するからである。高いポストに女性を任命することは、軍から見れば軍全体のイメージを低下させることになるからであるという。

#### （10）訓練のなかでの違い

最も基礎の訓練では、武器の使用ではなく、掃除が要求される。アメリカ海軍の女性兵士は、武器使用について全く教えられず、自分を守る自衛技術だけが教えられる。「ガッツのある男なら、誰も女には戦わせたくない」[Williams 1989: 55]。

男女の違いを強調したり、女性の生来の femininity を強調することによって、軍の排除や差別の現実には軍の男性性崇拝、戦争、戦いを再び是認するのである。女性は他者であり、国家の防衛に参加する機会が与えられていない。誰もがプロフェッショナリズムだと言っていたにも関わらずである。

しかし誰もが、他に女性もいることに「注意している」と言っていた。そのため、より寛大になると。女性はいまよくできないことを期待されている。違う訓練もよくある。男女の指導員の結果は「女性には身体的限界があるので」障害物コースでも違う扱いになっている。女性新兵は 11 ある障害物のうち六つしかクリアできない。取り除かれている障害物はかつて多くの女性が怪我したものであり、それらは男性の身体水準に合わせられていたからであった。こういう場合、女性を守らねばならないという考えが補強される。別の訓練の結果でも、陸上競技での女性の成績は男性より悪く、どの女性もよい兵士ではないと再認識される。女性新兵が男性と同じタイムで障害走を終えると驚かれる。女性の認められている「弱さ」とは「悪い兵士である」ことの原因であり、結果である。

#### （11）女性に開かれている仕事と役目

徴兵を行っているイスラエルを除いて、女性は志願して入隊する。世界の軍隊は徴兵政策の撤廃により「男」の人材不足に悩んでいる。ウェケッサーら作成の年表[Wekesser and Pokesetsky 1991: 185]によるとアメリカ最後の徴兵の年（1973年）、全員志願兵の軍では「もっと女性を受け入れるよう軍に圧力を」という要求が出た。シンガポールの場合も「入隊志願者の減少」[The Straits Times 17 Jan 1997]が報じられ、非戦闘と分類された軍のボス

トを女性に開いた [The Sunday Times 1 Dec 1996]。

シンガポール陸軍では通信隊、砲兵隊の戦闘役割を女性に開いている。前進に思えるが、よく見ると、戦闘とはいえ通信隊と砲兵隊は前線の隊ではない。他の三つの部署、機甲部隊、歩兵隊、戦闘工兵らの後ろに配置されている。

最近、戦闘に相応しい人材と「男の仕事としてふさわしいことがら」の再分類をした [The Sunday Times 1 Dec 1996] 結果が報じられた。以前は医学的に不適格と判断された人には、ある認定された仕事だけが与えられていた。新しい分類に伴い、「不適格と認定された」人もこの仕事に就くことになり、「通信隊の4分の1がこの区分に入る」 [The Sunday Times 1 Dec 1996] と報じられた。このことは、通信隊の女性が「不適格と認定された」男性と同等であることを示している。つまり戦闘とサービスの区別が、依然強く残っている。女性が通信隊に移るというのは、間接的な武器を用いて、戦いを支援するというイメージと結びついている。女性下級士官によれば、女性が戦闘職に就きたいと明確に希望を述べない限り、戦闘部門にはリクルートされないことになっている。

女性が受容されるジェンダー的行為を表明することは珍しいことではない。“feminine”でないということには損失を伴うからである。それにはレズビアンというラベルが貼られることも含む。さらにすべての女性に当てはまることではあるが、一人のはずれた女性兵士がいると、他のすべての人も疑いを掛けられてしまう。

#### (12) 男性中心の環境のなかで femininity を保持すること

男女とも似た理由で入隊している。世界を見るため、経済的自立と保証を得るため、安定した仕事に就くため、さらには愛国主義的な理由や個人的理由もある。愛国心よりもそれ以外の理由が多く、軍隊が表すものに惹かれる人は多い。

「多くの男性が軍に惹かれるのは、強い男性性 (masculine) とロマンティックな点である。制服、位階、危険、目的があること、雇用の機会、男性尊重、女性からの賞賛。すべてが男性や少年のイマジネーションを維持している」 [Mitchell 1991: 35]。

軍はいつも実践や決定に制限をつけることによって、女性の femininity を強調している。女性の制服は性別なしなので、戦闘で男性を悩ますこともない。しかし femininity は強調するのである。これは、軍事文化の男性的 (masculine) な側面の一つである。そこでは性的な征服は、男らしさと真の男性性 (true manhood) を表現することである。この奨励が転じると、ホモフォビアが制度化される。あらゆる男性の環境のなかで、ホモ・セクシュアルは「本当の」男でないと見なされる。これは、女のようにみえる女をいつも強調することにつながる。基地のなかで大股で歩く女性は、性的に分業されている男性の伝統的な違いを揺るがせることになる。今や、男女は同じ仕事ができる。男女の差は身体的外見の違いだけとなっている。

SAF では軍の女性に、化粧を要求していないが、禁じてもない。そしてすべての女性情報提供者が、仕事中は化粧をしたくないと言っている。特に、Number 4 S（カモフラージュ野戦服）についてそうした意見が聞かれる。そういう粗野な仕事の時には、合わないのかもしれない。しかし、多くが士官から、特に女性士官から少なくとも口紅くらいはつけるように「勧められる」と言っている。しかし、女性上官が去ると口紅をぬぐい去る。アメリカ海軍の女性は規則で化粧するよう命じられる。少なくとも口紅とアイシャドウをつけることを勧められる。

しかし、違いは、アメリカ海軍の女性兵士は規則で femininity を強調するよう要求されるが、SAF の女性は女性上官より、同じことを「勧められる」点である。このことは、軍隊の男女の身体的違いを維持させることに女性上官が関心を持っていることを示している。今日 SAF の年長の女性はサービス職の場合が多い。彼女たちもまた、自分たちが慣れ親しんだ軍事文化のなかにある行為規範を破ることで受ける損失をよく理解している。性的指向に疑問を持たれるからである。

女性の輸送司令官だけは Number 3（オフィスでの職務）でズボンを着用できる。他の女性はみなサービス職なら、公式な席ではスカートを履く。そうでないと「正しく見えない」のである。それで公式会議の女性軍人は軍に入ることによって新しい地平を開いたにも関わらず、どんなものを着て振る舞うのか、気を遣うことになる。ジェンダー・ロール・ステレオタイプに従うプレッシャーは、アメリカ海軍女性に例をみることができる。非実践的で寒くても、制服のスカートを着用する命令がよく出るからだ。

### （13） 継続的に違う扱いを女性に行ってきた結果

第一に女性を拒否したり否定したりすることは、軍にとって資源の無駄である。非効率的であり、効果的でない。資金を費やして男女を別々に訓練するのは無意味である。また効果的なやり方で軍や政府、社会、国家に報いてゆこうとする機会を女性から奪っている。アメリカ空軍の参謀長である Merrill McPeak 将軍は会議の前の宣言（1992）で「完全な戦闘任務を行うのに男性パイロットは女性よりも適任ではないが、それでも男性パイロットの方を支持する」[O'Dunivin 1994: 536] と言った。

「言い換えると McPeak 将軍にとって問題は、成果や能力ではなく、軍の効率でもない。女性の戦闘パイロットの存在が彼の正しいと思っているジェンダー・ロールに単に逆らうだけなのだ」[O'Dunivin 1994: 536]。

第二に、軍隊において女性を無視することは、男女の雇用機会均等を促進するという、軍の正当性に問題を突きつけるものである。

第三に、女性が入隊することを拒絶することで軍事予算の領域に男性のみが独占的にアクセスできるようになる。この経済領域は、排他的な男性雇用を生み出している。それはまた、男

と女が仕事では交替出来ないと言う考えを永続化させ、国防のために男は軍で不可欠だという考えを永続化させてしまう。そして「若い男性が比較的不足していることが、給与を上げている。若い女性が多くいることが、女性の雇用と賃金を比較的安くさせている」[Addis et al. 1994: xiv]。

Volzenilek は「軍における女性増加は、軍の民主化というよりも、貧困の女性化を招いている」[1991: 50] と指摘している。このように戦闘から女性を排除することが、実際には、伝統的に男性のために取り分けられてきた経済的優位さの領域から女性を締め出すことになっている。

#### (14) 結 論

女性兵士の feminization は、女性に対する社会的期待と軍の持つ殺人、死、血にまみれたイメージの両方に対して当てはめる試みである。つまり「女性と戦争」「女性と戦闘」という相容れないものをつなぐための試みである。しかし、feminization のプロセスはジェンダーのステレオタイプを支持し、絶えず再確認する。女性兵士は他の女性兵士を、伝統的に男性中心の戦闘領域に入ることを規制している。そして、女性のイメージを確認するため口紅などの推奨が関与している。こういう女性らは、femininity を失うことで被る損失について気づいている。その損失とは同僚兵士（男女とも）から敬意を払われなくなることから、キャリア上昇が阻害されたり、またハラスメントを受けたりする等の極端な例も含んでいる。男性性（masculinity）の礼賛と制度化された女性差別を持つ軍隊制度は、男女の容認可能な行動規範に女性を黙従させるものである。

ここに、悪循環がある。女性は、男性文化を礼賛するがゆえに差別されている。この男性文化礼賛は男性と女性が別々の違うものであることを、そして男性が masculine で、女性が feminine であることを強調している。こうして女性、男性、制度としての軍隊は、男女にはいつも融和しがたい違いがあるという男女観を強化している。SAF の広告がそのよい例である。女性は男性中心のフィールドで feminine であることが期待されている。そのため女性は二つの矛盾する役割のバランスをとらなければならない。masculine な仕事をしなければならない一方で feminine でいなければならない。軍人各人も、女性の違いを了解している女性の例をよく取り上げる。femininity を了解し、あまり働かず、女性は軍隊職に向いていないことを「証明」し、そのため戦闘に就くことに抵抗を示すことを自ら心得ている。軍も軍人も、男であれ女であれ、いつも軍隊にいる女性に「要求されている」femininity を強調する。femininity の強調は、実際に現場で女性兵士があまり業績を上げないところから来ている。なぜなら訓練の基準が違うからである。そのため、女性はできの悪い兵士になることを強要される。女性が入隊したり、奨励されたりする際に再び差別され、その悪い循環は続く。

女性が軍に入隊することで、女性がすべきでないと思われていることをうち破り、窮屈なステレオタイプに合わせるとするのは、皮肉なことである。軍隊は男性性礼賛だけの機関ではない。それはまた masculine の反対のものとしての femininity をも礼賛している。境界を越えて行く者には「レズビアン」「ラディカル・フェミニスト」というラベルや侮辱による制裁がある。

そして、軍隊の女性はあまり feminine にならないようにという微妙な状況を渡らなければならない必要も起こる。「feminine であることが低水準であることを意味しているからである。masculine であるよりも、まだ悪いのである」[Williams 1989: 67]。masculine すぎるのも困る。「彼らは Jane にさせたくないで John がそれをやらねばならない “John has to do it because they won't let Jane do it”」[Johnson 1996: 12] という言葉を考えてみたい。「彼ら」には男と女の両方を含んでいる。女性もまたジェンダー・ロールのステレオタイプの国際化や差別の制度化を強いられており、そしてまた他の女性の支配もするのである。

軍の、あるいは男性兵士や女性兵士のせいにするには、あまりにも複雑すぎる。むしろ、そういった要因の組み合わせであり、また一般に受容されている性役割のステレオタイプのせいで、女性は軍隊の完全なメンバーになることができないのである。

#### 4 お わ り に

軍隊という制度のなかで、男女平等を実施することが、どういった現実を引き起こすのか、クアの論文に詳細が述べられていた。女性が入隊しても、支援するサービス部門からも、兵士の間でも、訓練の際の上官からも、女性からも彼女たちの feminization を強化する働きかけが起こることについて、具体的に言及していた。社会のあらゆる機関や制度において、男女いずれもが参加する権利を保障することと、軍隊に限らず様々な制度において男女の機会均等が実現されることは、多くの困難を伴っていることがわかった。

そうすると、軍事制度における女性兵士への機会均等は、部分的開放か全面開放かを問うことに意味はない。この問いは、シンガポールにおける軍隊の位置づけに関係する。

狭い国土、密集した人口、天然資源の欠如、周辺諸国の問題が国内問題に直結するような多民族状況、シンガポールが独自に抱えているこういった現実のなかで、軍隊がそれ自体一つの制度として機能している以上に、軍隊が持つ価値指向、防衛という認識等が、制度から離れ、細分化され、一般の人々の日常生活に入り込んでいる。軍隊と社会との関係は、制度としては、社会のなかに軍隊が包摂されていることになるが、実際には外交、経済、教育、住宅、企業経営、投資等といった様々な場面で、軍事的な決定や価値を基盤とする制度が実施されている点を鑑みるならば、むしろ軍隊と社会との関係は等しいとまで言うことができよう。

クアが、女性兵士にとって入隊は feminization されることであると指摘したが、軍において女性に要求されるジェンダー・ステレオタイプは一般社会にも平行して見ることができ、同時に一般社会の人々も、同様の feminization を絶えず女性に対して要請していると考えられる。feminization は社会の軍事化を推し量る、一つの具体例として見るができるが、トータル・ディフェンスの概念で見たとおり、教育や住宅、宗教、言語、経済政策などといった日常的に関わる物事の多様な場面で、有事に限らず、いつも国防を前提とした実践が繰り返されている。そういう意味でハックスレイが言った通り、緻密に防衛された国と言うこともできるが、同時に、軍事化されたジェンダー規範が様々な事象に十全に浸透しているということもできる。

#### 注

- 1) 2004年2月のシンガポールのテレビでは政府広告として、化学テロに備えた映像をCMの間に流していた。警報が鳴った場合にまず窓を閉め、内側からマスキング・テープを窓枠に貼り、カーテンを閉めて、一カ所の部屋に家族全員が集まり、ラジオで次の指示を待つようにといった一連の行動を映像にまとめたものであった。
- 2) 実際にこういった文言は何かの行事の際にスローガンのような形で幕に書かれたりする。また1998年以来、学校はイギリス軍が日本に降伏した2月15日を Total Defence Day として記念し、防災等に関する行事を行っている。
- 3) 1990年にイラクがクウェートに侵攻した際には、シンガポール政府は石油備蓄を行った。

#### 参考文献

- Chan, S. Jasmine. 1990. *Ideology in Advertising: The Singapore Armed Forces Advertisements*, thesis for the degree of Master of Social Sciences, National University of Singapore.
- Da Cuniha, Derek. 1999. "Sociological Aspects of the Singapore Armed Forces", *Armed Forces and Society* 25 (3): 459-475.
- Dorai, Adrian Jason. 2001. *The 'Defiant' Soldier: Understanding the Phenomenon of Recurrent Offending by Tamil National Servicemen*, an honours thesis for the degree of Bachelor of Social Sciences, Department of Sociology, National University of Singapore.
- Huxley, Tim. 2000. *Defending the Lion City: The Armed Forces of Singapore*, Australia: Allen & Unwin.
- Kua, Joanne Shu Ling. 1997. *Women and The Military: The "Feminization" of Women in the Military*, an academic exercise for the degree of Bachelor of Social Sciences, Department of Sociology, National University of Singapore.
- Le Blond, Raoul Gerard. 1995. *"Be Soldier, Be a Man": The Social Construction of Masculinity*, Singapore: Singapore Press.

- linity among National Servicemen, an academic exercise for the degree of Bachelor of Social Sciences, Department of Sociology, National University of Singapore.
- Ngoei, Su May Michelle. 2001. *Beyond Military Defence: National Service and Singapore Society*, an honours thesis for the degree of Bachelor of Social Sciences, Department of Sociology, National University of Singapore.
- 佐藤文香 1998. 「日米の女性兵士をめぐるジェンダー・イデオロギーの変遷」日本女性学会『女性学』7: 132-152
- エンロー, C. 2003. 「軍事化とジェンダー——女性の分断を超えて——」『思想』3: 4-20
- 山下明子 1991. 「戦争・宗教・フェミニズム——女が世界を変える——」『フェミローグ』2 (7月号): 129-157
- 『女性と軍隊』論文内での引用文献
- Addis, Elisabetta, Valeria E. Russo, and Lorenza Sebesta (eds.). 1994. *Women Soldiers, Images and Realities*, New York: St. Martin's Press.
- Barkalow, Carol, and Amdrea Raab. 1991. The Armed Services do not Discriminate. In Weksser Carol and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA: Greenhaven Press, pp. 137-143.
- Boulègue, Jean. 1997. "Feminization" and the French Military: An Anthropological Approach, *Armed Forces and Society* 17 (3): 343-362.
- Culbertson, Amy L., and Paul Rosenfeld. 1994. Assessment of Sexual Harrassment in the Active-Duty Navy, *Military Psychology* 6 (2): 95-108.
- Feld, M. D. 1978. Arms and the Women: Some General Considerations, *Armed Forces and Society* 4 (4): 557-568.
- Firestone, Juanita M., and Richard J. Harris. 1994. Sexual Harrassment in the US Military: Individual and Environmental Contexts, *Armed Forces and Society* 21 (1): 25-43.
- Holm, Jeanne M. 1991. The Persian Gulf War Proved that Women can Serve in Combat. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA: Greenhaven Press, pp. 67-72.
- Johnson, Gregory. 1996. Comment and Discussion: John Has to Do Because Jane can't, *Proceedings*, Vol. 122/ 10/1, 112, October.
- Koh, Kelvin Chi Wee. 1993. Sex Integration in the Military, *Pointer, Journal of the Singapore Armed Forces*, 19 (4) 72-81.
- Mitchell, Brian. 1991. Women Make Poor Soldiers. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA: Greenhaven Press, pp. 29-38.
- O'Dunivin, Karen. 1994. Military Culture: Chance and Continuity, *Armed Forces and Society* 20 (4): 531-547.
- Rustad, Michael. 1991. Discrimination Makes Women Soldiers Ineffective. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA: Greenhaven Press, pp. 123-127.
- Saywell, Shelly. 1991. Women were crucial in Israel's War for Independence. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA: Greenhaven Press,



- pp. 156 – 164.
- Suh, Mary. 1991. Canada Successfully Allows Women to Serve in Combat Positions. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA : Greenhaven Press, pp. 170 – 171.
- Vozenilek, Helen. 1991. Women should not Support America's Military Goals. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA : Greenhaven Press, pp. 50 – 52.
- Wekesser, Carol, and Matthew Polesetsky. 1991. Chronology. In Carol Wekesser and Matthew Polesetsky (eds.). *Women in the Military*, CA : Greenhaven Press, pp. 184 – 185.
- Williams, C. L. 1989. *Gender Differences at Work : Women and Men in Nontraditional Occupations*. Berkeley, CA : Univerisity of California Press.